

平成8年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報

1997・3

小矢部市教育委員会

はじめに

小矢部市は富山県の西端に位置し、市域は三方を低丘陵の山に囲まれ、東側は広大な庄川扇状地へと開いている。中央を北流する小矢部川はその支流である子撫川、渋江川の流れを集め、良好な沖積地を形成しながら日本海へと注いでいる。この小矢部川の水運や石川県との境を画す雨波山丘陵の俱利伽羅峠を抜ける北陸道に開通して、多くの遺跡が遺存している。

本年度発掘調査は総数12件（内国庫補助対象5件）、対象面積約38,000m²である。社会情勢を反映してか調査件数は従来に比べかなり減少した。しかしながら道林寺遺跡では、原凶者の方のご好意で一部本調査を実施させて頂き、中世期の掘立柱建物とともに木組を含む井戸が出土し、この周辺一帯に良好に残る条里地割と集落開発の関係を探る資料を得ることができた。また、高木山遺跡では今から約4,500年前の縄文時代中期前葉に比定される土器産廃場から多量の土器とともに、動物型土製品や土偶が出土し、貴重な資料を得た。

本書は本年度の調査概要を報告するものである。これらの発掘調査は開発行為者、土地所有者、地元の方々の理解と協力がなければ成り立たない。ここで記して謝意を表したい。

平成9年3月

小矢部市教育委員会

教育長 荒川昌夫

目 次

はじめに

I 調査経過	1
II 境牛上野遺跡発掘調査概要	3
III 日の宮・道林寺遺跡発掘調査概要	13
IV 高木山遺跡発掘調査概要	27
報告書抄録	

例 言

- 1 本書は富山県小矢部市内で平成8年度に国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財緊急調査事業の概要を報告するものである。
- 2 発掘調査は、国庫補助事業50%、県費25%、市費25%の費用負担割合で実施した。
- 3 調査は伊藤隆三（小矢部市教育委員会社会教育課主幹）、塚田一成（小矢部市教育委員会社会教育課文化財係主事）、藤城全代（同主事）、辻谷真夕が担当した。
- 4 現地調査は平成8年4月1日 начиная с, 平成9年1月24日に終了した。
- 5 本書の編集は、伊藤の指導のもと、塚田の協力を得て、藤城と辻谷が行った。なお文責は文末に記した。
- 6 本書作成にあたって、宮田進一氏（富山県埋蔵文化財センター企画調整課長）、安念幹倫氏（富山県埋蔵文化財センター企画調整課主任）、島田修一氏（富山県埋蔵文化財センター企画調整課文化財保護主事）、安英樹氏（石川県埋蔵文化財センター企画調整課主事）、布尾和史氏（石川県埋蔵文化財センター調査第3課主事）各氏のほか多数の方々の教示を得た。記して謝意を表したい。
- 7 遺物は一括して小矢部市教育委員会が保管している。

I 調 査 経 過

平成8年度に小矢部市内で実施した埋蔵文化財調査は、試掘調査・本調査・分布調査・立合調査を合わせて総数12件、調査対象面積は46,533.2m²であった。調査の原因は、宅地造成、駐車場建設、特別養護老人施設建設などさまざまである。これら調査のうち国庫補助事業として実施したのは5件、対象面積38,498m²である。そのほとんどは遺跡の所在確認のための試掘調査である。№2・3については遺構、遺物がまったく検出されなかったり、ごく少量であったものであるため、№1・4・5について調査の概要を記すこととする。なお、道林寺遺跡については試掘調査の後、原因者に調査費の負担をお願いして本調査を実施しているのでその調査結果の一節も合わせて紹介したい。

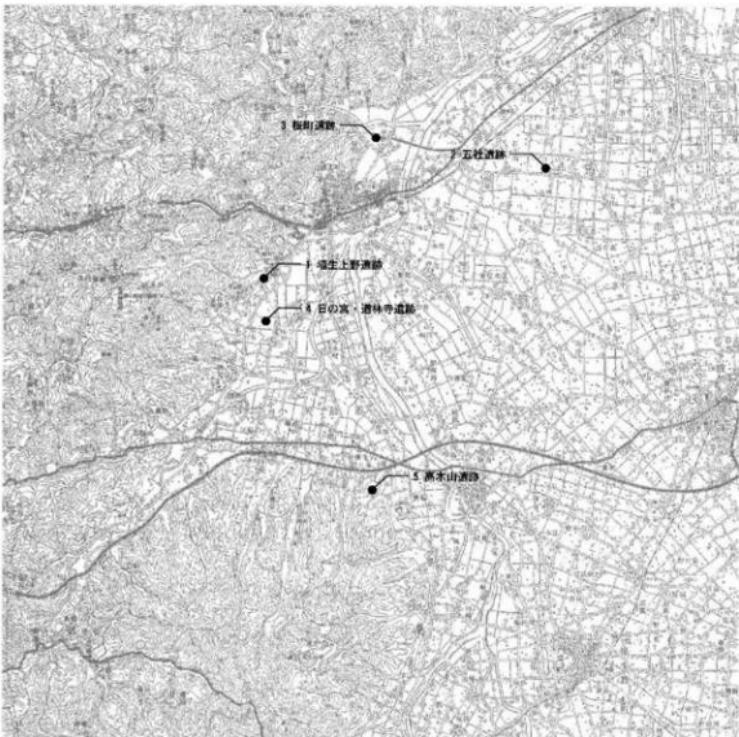


図1 平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業(国庫補助)実施位置図(S=1/100,000)

平成8年度埋蔵文化財発掘調査一覧(国庫補助分)

No.	遺跡名	所在地	調査の原因	調査期間	対象面積	調査結果・取扱い
1	埴生上野遺跡	小矢部市 埴生上野4829	宅地造成	H8.5.14 ～6.28	825m ²	本書報告。
2	五社遺跡	小矢部市 五社389-3	個人住宅建設	H8.5.31 ～6.6	196m ²	遺構・遺物ともなし。
3	桜町遺跡	小矢部市 桜町産田1431-1外	駐車場建設	H8.5.20 ～6.24	544m ²	須恵器・土師器出土。
4	日の宮・道林寺遺跡	小矢部市 道林寺312-1外	分譲住宅地造成	H8.4.1 ～4.30	19,933m ²	本書報告。 一部原因者負担で本調査。
5	高木山遺跡	小矢部市 浅地浄土寺120-1外	特別養護老人施設建設	H8.4.1 ～4.30	17,000m ²	本書報告。 建設予定地変更のため一部保存。

II 塩生上野遺跡発掘調査概要

所在地 小矢部市塩生上野4829

調査期間 平成8年5月14日～6月28日

調査対象面積 825m²

調査の原因 宅地造成

調査日誌(抄)

5.14 試掘ピット設定。掘り下げ開始。

6.18 写真撮影。図面作成。

27 遺物出土。

28 埋め戻し。調査終了。

6.3 遺構検出。

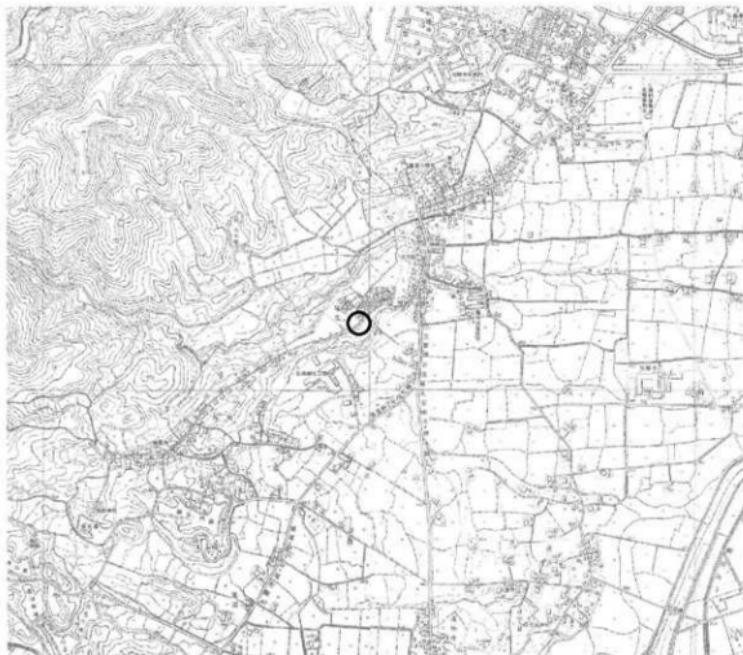


図2 発掘調査位置図(S=1/15,000)

調査概要

埴生上野遺跡は、砺波山丘陵から北東に延びる標高約50mの舌状台地上に位置し、標高約40mを測る南東斜面裾にまで範囲が及んでいる。当遺跡は過去の調査において特に縄文時代の遺物の出土量が多く、縄文時代中期前葉から後期初頭を中心として、石器類、土製品なども豊富に出土している。平成4年度の調査では三角墳形土製品なども出土している。同遺跡より約200m北東の丘陵先端部には5世紀末葉築造の若宮古墳、約600m北西の丘陵斜面には奈良時代の谷内窓跡群などが所在する。また近世北陸道の通過点として近世においても主要地であったと考えられる。戰後、台地上の宅地造成が進み、現状は階段状の田畠に利用されている。調査対象地は台地斜面から平野にかけて約11mの比高差があり、平成6年度の調査では（図3参照）多量の縄文土器が出土し、その出土状況、地形より土器廃棄場であると考えられている。今回の調査区は6年度調査区南側下段にあたる（同図）。

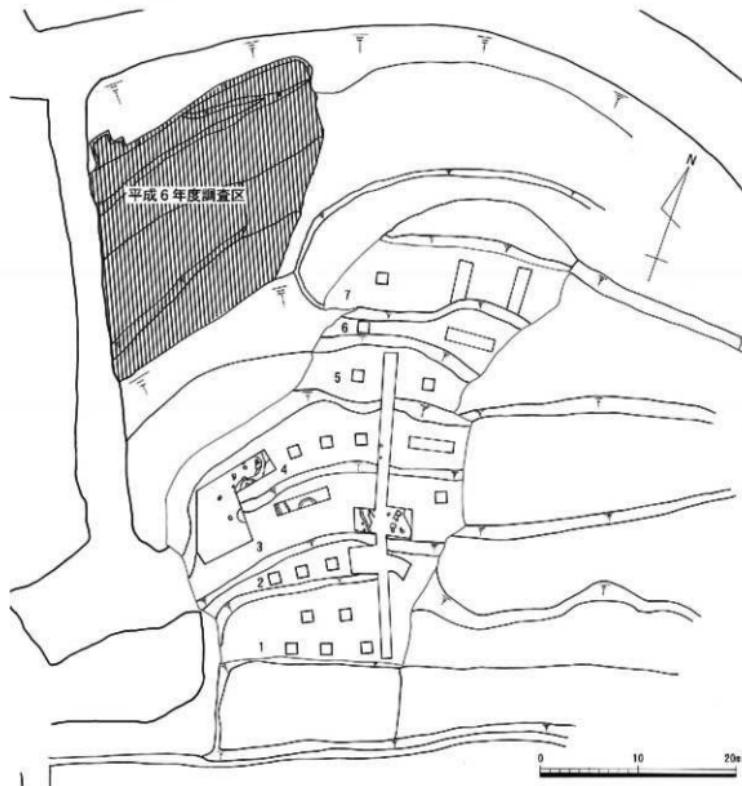


図3 調査区全体図(S=1/500)

調査は現況の地形を利用し、平野側から台地上部に向い第1～7調査区を設定。対象地域全域に一辺約1mのテストピットを設定し、遺物の分布状況を把握した後、分布が濃密な部分については適宜調査区を拡張した(同図)。この結果、第1調査区は黒色粘質の搅乱土と考えられ、遺物の種別も様々であった。遺構は確認できなかった。第2調査区では当遺跡の遺物包含層の南限を確認した。第3調査区では包含層の東限と3条の溝、12のピットを検出した。遺物は細片であるが須恵器や土師質土器片が出土したが、詳細な時期決定には至らなかった。第4調査区では包含層の上層から弥生土器、須恵器、土師器、中世陶磁器、瓦器などが出土し、1条の溝、18のピットを検出したが詳細な時期と性格は特定できなかった。第5調査区は包含層からの遺物を検出した。第5調査区から第7調査区では畑地化の際の削平により包含層、遺構ともに検出できず、若干の遺物の採取にとどまった。

- 注 1) 小矢部市教育委員会『平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』(小矢部市埋蔵文化財調査報告書第37冊) 1993
 2) 小島俊彰「三角墳形土器」「縄文文化の研究」9、雄山閣出版 1983
 3) 小矢部市教育委員会『平成6年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』(小矢部市埋蔵文化財調査報告書第41冊) 1995



図8 調査状況(北から)

遺 物

縄文時代(図 5)

出土した遺物は、縄文土器、スタンプ型土製品、打製石斧、磨製石斧、石錐、石鎌、及び黒曜石・安山岩などの剝片が出土した。縄文土器とスタンプ型土製品について図示する。1・6～10・13～18は口縁部破片、19は底部、その他は胴部破片である。1には蓮華文が施されている。2・5は半截竹管による半降起線文が縱走している。3は格子目文がみられる。6には隆起線文の縁辺に楔形の刻みをもつ。以上の特徴から新崎式と考えられる。13は細片であるが綾杉文を施した隆起線文が見られ上山田I式のやや古い段階と考えられる。9は横行する沈線の縁辺に楔形の刻みが施され氣屋式と考える。10は沈線による工字状文が、11は葉脈状文が施されている。7・14は沈線に刺突文が施され、以上の特徴から串田新式と考えられる。15は沈線と列点施文から前田式である。16～18は先端の鋭利な工具で押し引き施文された三角刺突文や、口縁部の波頭部に沈線と指頭圧痕が施文されており氣屋式である。19は網代日の圧痕を有する。20のスタンプ型土製品は完形品が1点包含層より出土した。つまみ部頂点から底面は高さ3.7cmを測り、短軸2.9cm・長軸3.6cmを測る底面は凸レンズ状に脹らみ、平面型は橢円形をしている。ここに刺突による渦巻文が施されている。つまみ部は無文で上端は先ぼそりになっている。

弥生時代(図 6)

出土した弥生時代は、壺(1～5・11～13)、甕(6～8)、高杯(9・10)、瓶(14)がある。1・2は口縁部がゆるやかに外反し、外面には縱方向に刷毛調整が施されている。3は短い有段口縁部をもち、頸部以下の外面には縱方向の、内面には横方向の刷毛調整が施されている。4・5は口縁部が直線的に外反し、外面には縱方向に刷毛調整されている。なお4は口縁部先端で面取りされしており、内面には横方向に刷毛調整が見られる。6・7は有段の口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、外面に擬凹線文が施され、口唇部は丸く仕上げられている。刀影I式に比定される。外面は縱方向に刷毛調整が、内面はヘラ削りされている。なお7には赤色顔料が塗彩されている。8は短い有段の口縁を持ち、外面には不規則ではあるが貝殻の腹縁によると見られる刻みが見られる。内外面を横ナデで仕上げてある。14は底部に焼成前に約13cmに孔を穿つ瓶である。6・7以外は胎土に海綿骨針を若干含む。

奈良時代(図 7)

出土した遺物は、少量であるが須恵器と土師器である。土師器は摩滅が著しく、図化は須恵器だけにとどめた。須恵器には、杯蓋(1～3)、有台杯(5～8)、無台杯(4)、長頸瓶(9)、壺(10)、甕がある。杯蓋1、2は天井部の上方2分の1をヘラ削りによって偏平な形態にし、ナデにより仕上げてある。端部付近に段を有し、屈曲した端部の先端はやや鋭い。3の先端部は折り返しの内側に段を有する。有台杯は全形を知り得るものではないが、法量に大きなばらつきはない。高台

は低く、ふんぱりをほとんど失っている。ナデにより仕上げてあるが6、7はヘラ削りの痕跡がやや残っている。無台杯は口径14cm、器高2.5cmである。口縁端部にかけて外反し、内外面ともにナデ仕上げされている。9は長頸瓶の底部である。0.9cmを測る高台は外方へ強く張り出す。10は胴部で2本の弦線が認められ、内外面ともにナデで仕上げられている。いずれも8世紀後半に属すると考えられる。なお、2・4・7は焼成が不充分でやや軟質、白色を呈する。

中世(図7)

出土した遺物は、珠洲(11~18)と瓦器(19)1点である。珠洲には甕と鉢がある。11はII期に属し、12~15・17・18はIVからV期に属すと考えられる。今回出土した珠洲は12世紀後半の一群と15世紀前半にまで大きく時期幅がある。なお13・18・19には海綿骨針が若干含まれる。瓦器は「奈良火鉢」と呼ばれているものと考えられる。平面円形の浅鉢であり脚の数は3本と推測される。体部外面に加飾はされていない。奈良火鉢編年図によるとII期に属し、14世紀中頃から15世紀中頃に現れる。

(辻谷)

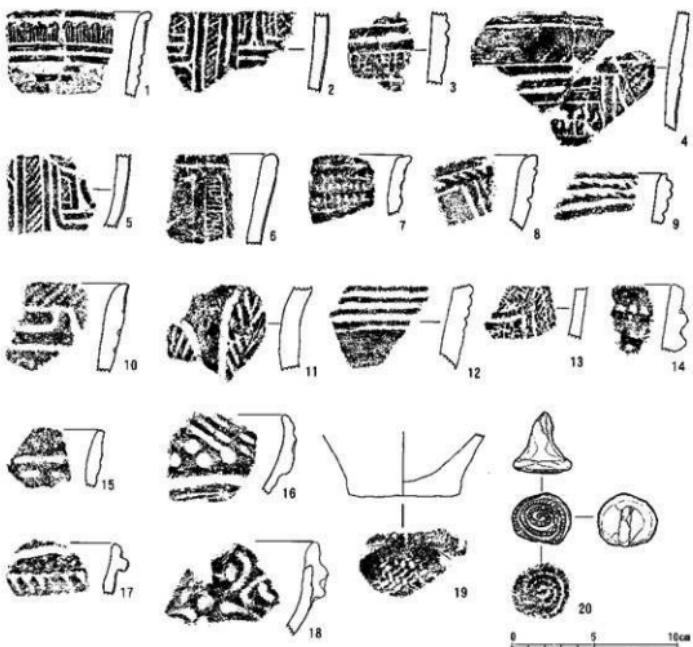


図5 純文土器・スタンプ型土製実測図($S=1/3$)

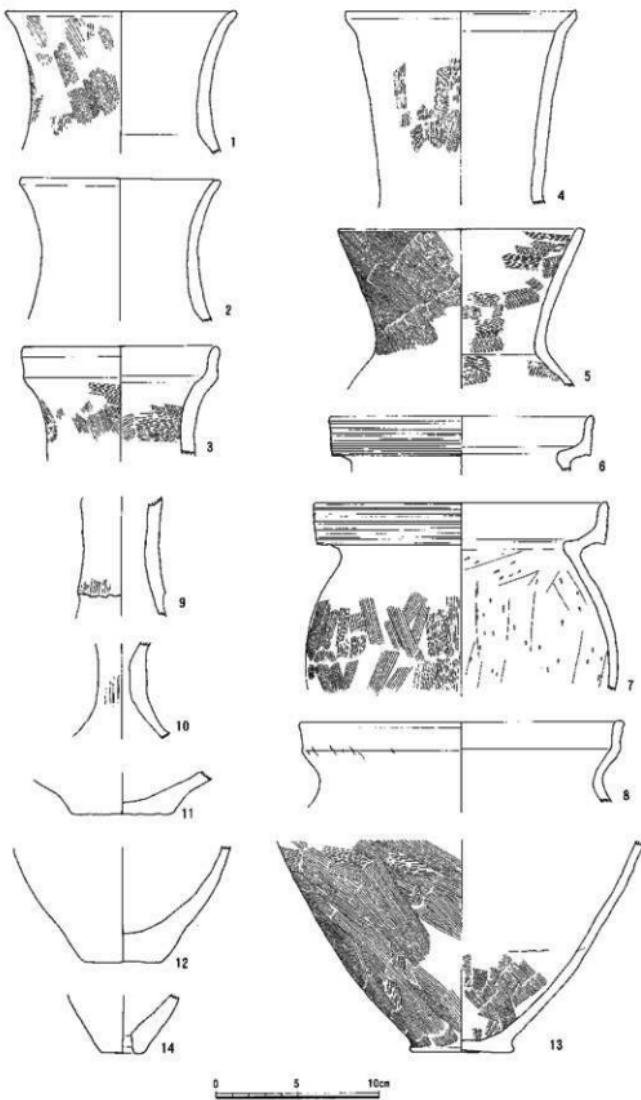


図6 弥生土器実測図 ($S=1/3$)

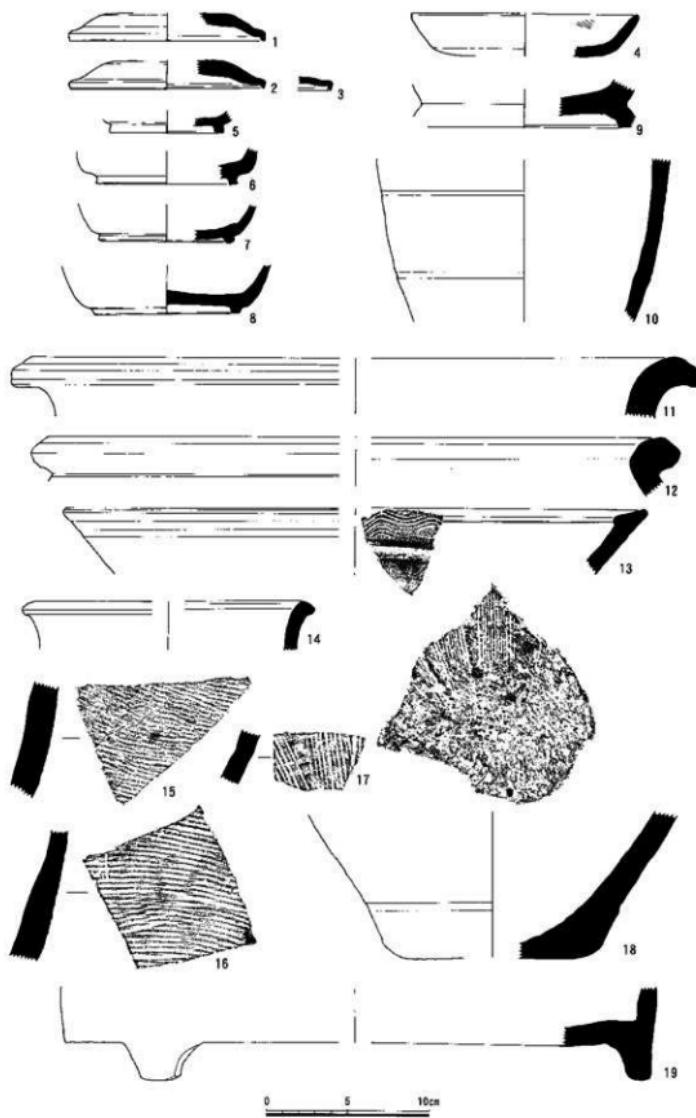


図7 須恵器・珠洲・瓦器実測図 ($S=1/3$)

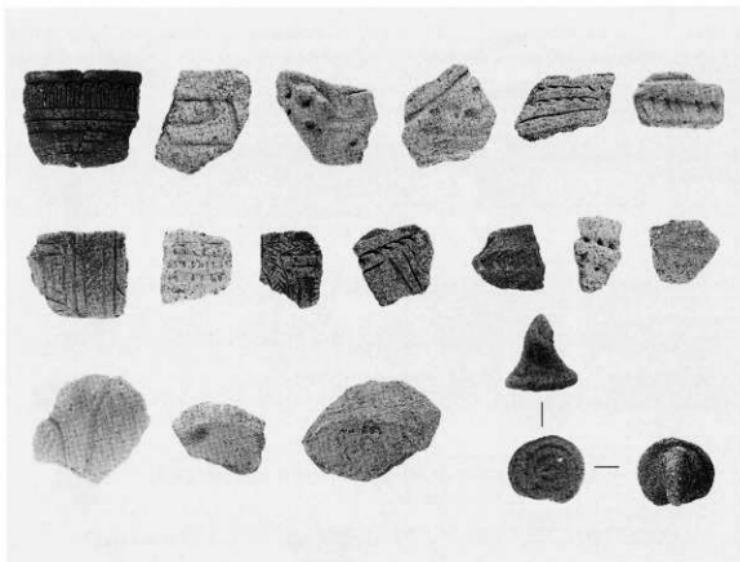


図8 繩文土器・スタンプ型土製品

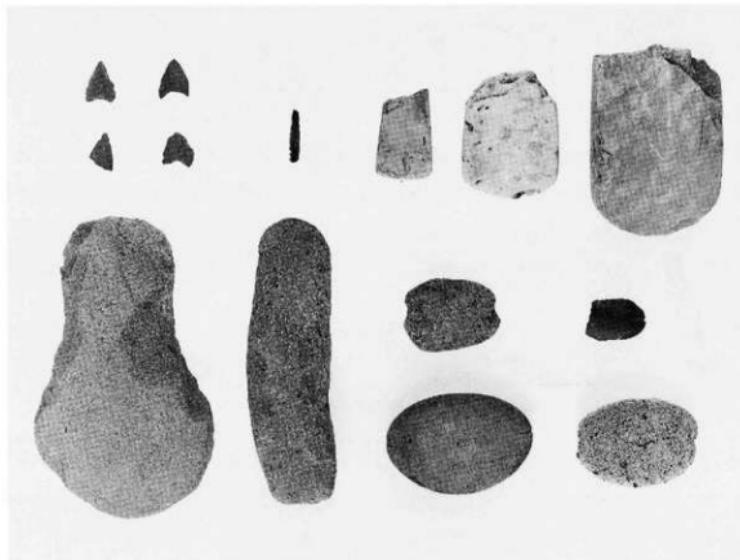


図9 石器

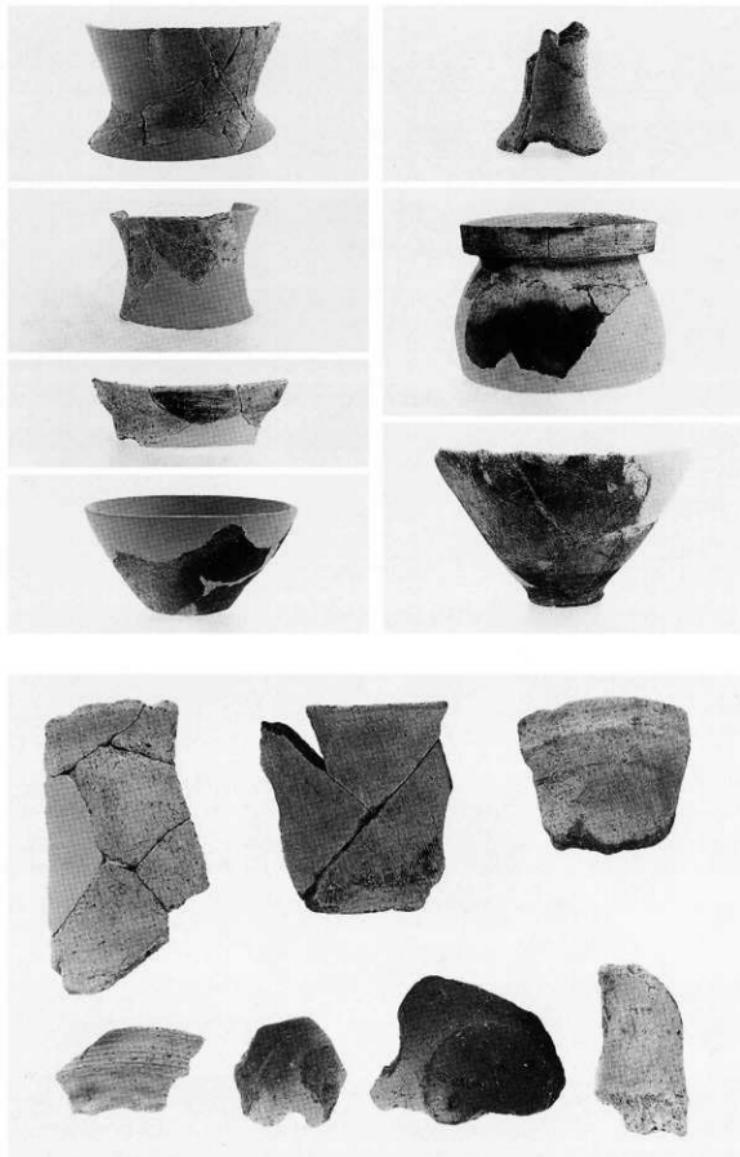


図10 弥生土器(上 単体、下 集合)

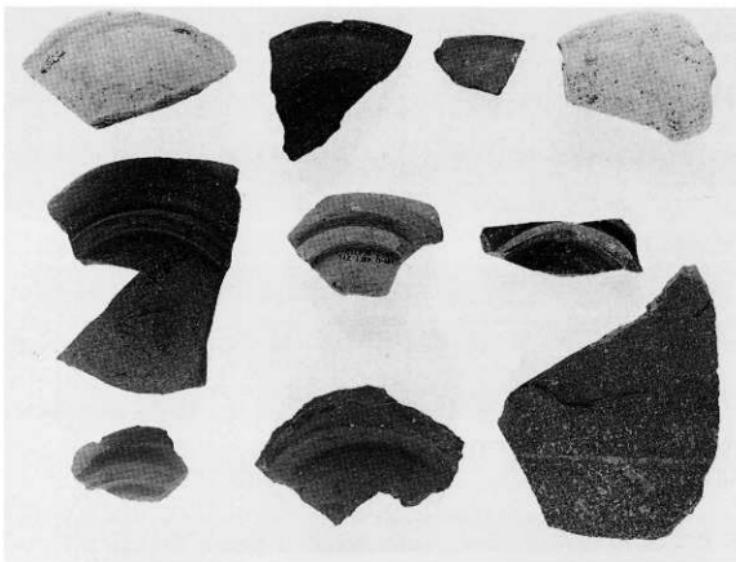


図11 須恵器

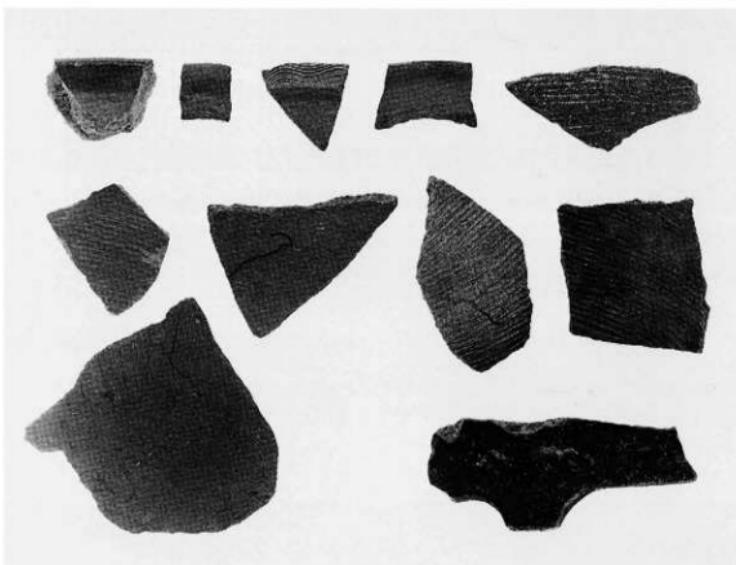


図12 珠洲・瓦器

III 日の宮・道林寺遺跡発掘調査概要

所在地 小矢部市道林寺312-1外

調査期間 平成8年4月1日～4月30日

調査対象面積 19,933m²

調査の原因 分譲住宅地造成

調査日誌(抄)

4.2 試掘トレーナー設定。掘り下げ開始。

9 遺物検出。

11 遺構検出。

4.16 写真撮影。図面作成開始。

30 埋め戻し。調査終了。



図13 発掘調査位置図 (S=1/15,000)

調査概要

日の宮・道林寺遺跡は、石動市街地の南西、小矢部川と渋江川の合流点付近、渋江川左岸の段丘上に位置する。この遺跡の規模は市内遺跡の中でも著しく大きく、東西約0.5km、南北約1.5kmを測る。周辺一帯は、市内でも最も遺跡の集中する地域である。この一帯は從来、「蓮沼城跡」、「日の宮遺跡」、「蓮沼遺跡」、「長高塚古墳群」、「檍掛遺跡」、「道林寺I遺跡」、「道林寺III遺跡」、「道林寺IV遺跡」と呼ばれる遺跡があったが、昭和57年に実施した遺跡詳細分布調査でこれらの区分が不可能であることが明らかになったため、すべてを含む広域を一遺跡として「日の宮・道林寺遺跡」と呼称することとした。付近には、北に北反戸遺跡、東隣接地には松永遺跡の遺跡が分布している。道林寺遺跡東方では過去の調査で墨書き土器や縁袖陶器が、松永遺跡では埴仏、瓦などが出土しており砺波郡衙、砺波関、古代寺院、坂本駅家などの存在が考えられる重要な地域で、交通の要所としても注目されてきた。今回の調査地点は遺跡の北端にあたる。

調査は対象地全域に一辺約1mのテストピットを設定し、遺物の分布状況を把握した後、分布が濃密な部分については適宜調査区を拡張した。この結果、耕作土直下に古墳期の遺物を包含する淡黒褐色粘質土層が広がっている。この包含層を切って溝とピットが検出され、若干の土師器が出土した。

周辺は昭和49年から昭和51年までの間には場整備が行われており、このため縄文時代から中世・近世の遺物がほぼ同一の包含層から出土している。このため各資料は一括性に乏しい。



図14 調査状況

①調査区は一部本調査を実施した地区である。ここでは東西方向の溝1条と掘立柱建物1棟、井戸2基、柱穴を検出した。掘立柱建物SB-01は2間×3間で柱間は約150cm～200cmである。井戸SE-02は素掘り井戸、SE-03は木組井戸である(図19～22)。木組井戸は板材を縦方向に組み、四隅に立てられた柱に取り付けた横桟で保持している。出土遺物として土師器・須恵器、中世土師器、珠洲、また一番底からはヒョウタン製の柄杓がある。SB-01に付随していた可能性が高い。土師器はいわゆる長胴甕であり、口径22cm、口縁端部を強くヨコナデする事によって口唇部が斜め上に面をなす。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、胴部内外面とも内外面ともハケメのあとカキメを施す。溝SD-01はほぼ東西方向の溝で北側が既に掘削されており本来の幅は不明である。

④調査区では溝3条を検出できた。SD-03とSD-04は北西から南東方向へほぼ平行して検出された。遺構に伴う遺物はない。SD-02は南北方向の溝である。

⑥調査区は一部本調査を実施した地区である。調査区の南半分は遺構や遺物を検出することはできなかったが、中央やや北寄りで素掘り井戸1基、東西方向の溝1条、柱穴を検出している。素掘り井戸SE-01からは土師質の擂鉢2点が出上している。形態は珠洲編年のV期の擂鉢に類似しており時期は15世紀に属すると考えられる。SD-06は幅約3m、深さ10cm～20cmの溝である。覆土からの遺物はなく、所属時期は不明である。

⑨調査区では地区の西端ではほぼ南北方向の溝SD-05を検出した。この地点からは遺物が全く出土しなかつたため、所属時期は不明である。

(藤城)

注 1) 小矢部市教育委員会『道林寺遺跡』(小矢部市埋蔵文化財調査報告書第22号) 1987

2) 宇野隆夫「井戸考」『考古史料による古代と中世の歴史と社会』(有)真陽社 1989

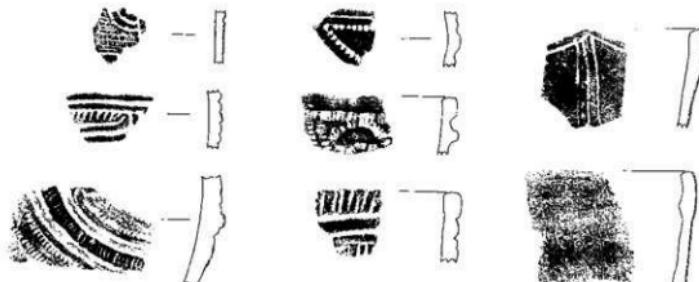


図15 繩文土器実測図(S=1/3)

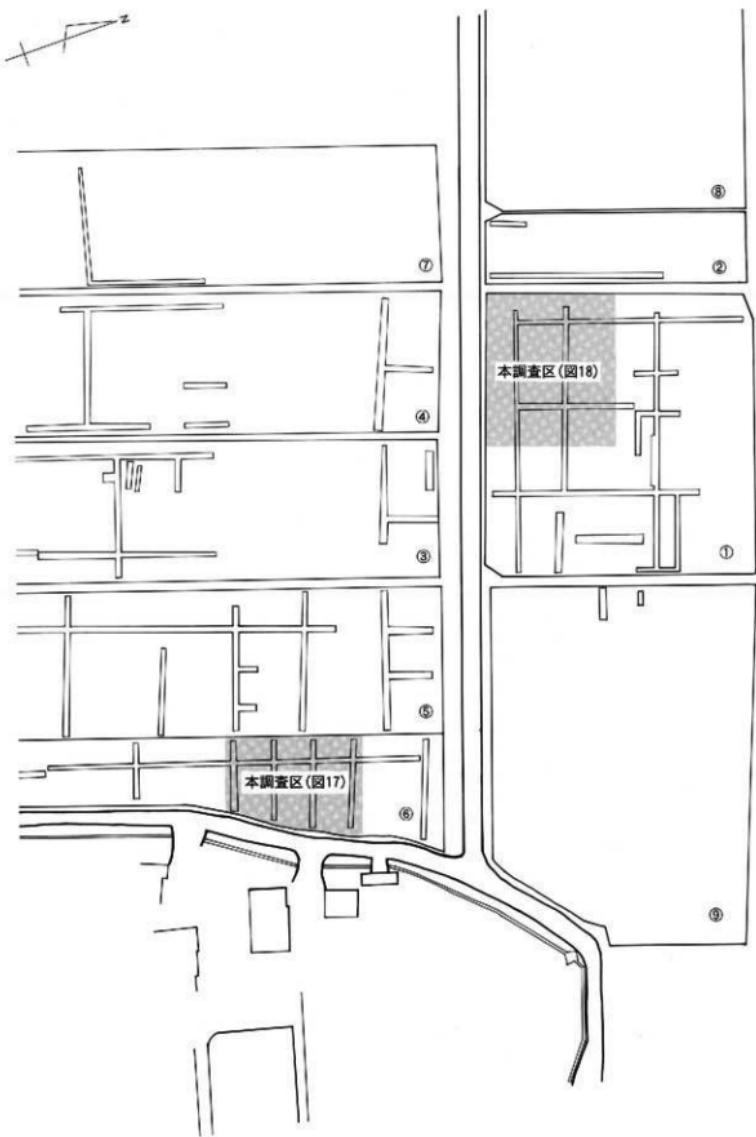


図16 試掘トレンチ位置図 ($S=1/250$)

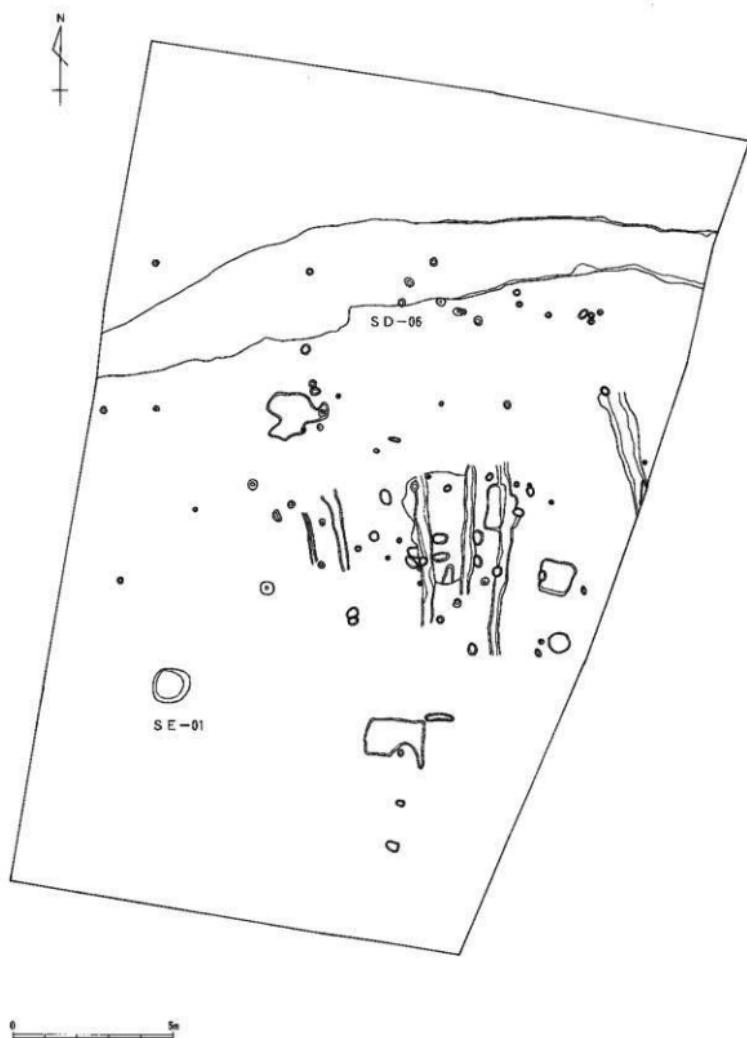


図17 ⑥調査区遺構実測図 ($S=1/150$)

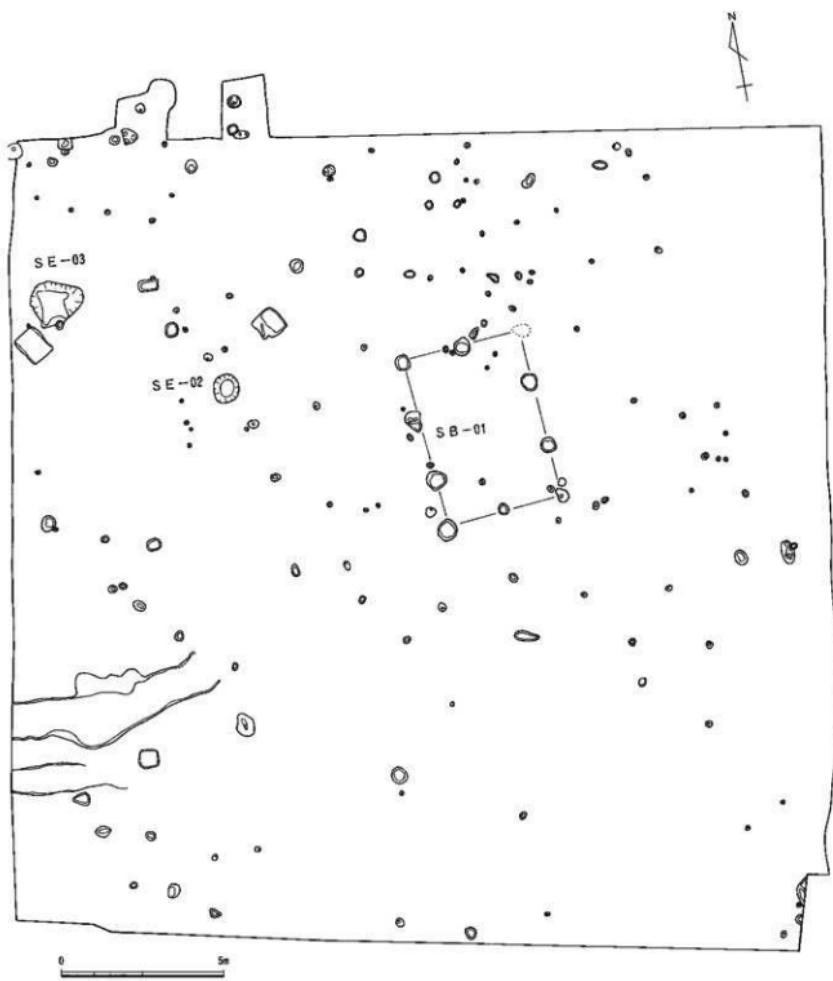


図18 ①調査区遺構全体図 ($S=1/150$)

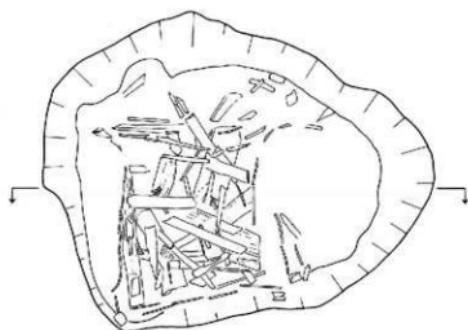


図19 S E-03平面図(S=1/20)

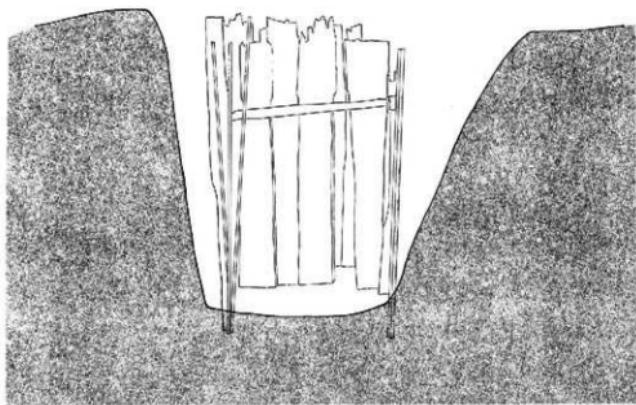


図20 S E-03断面図(S=1/20)

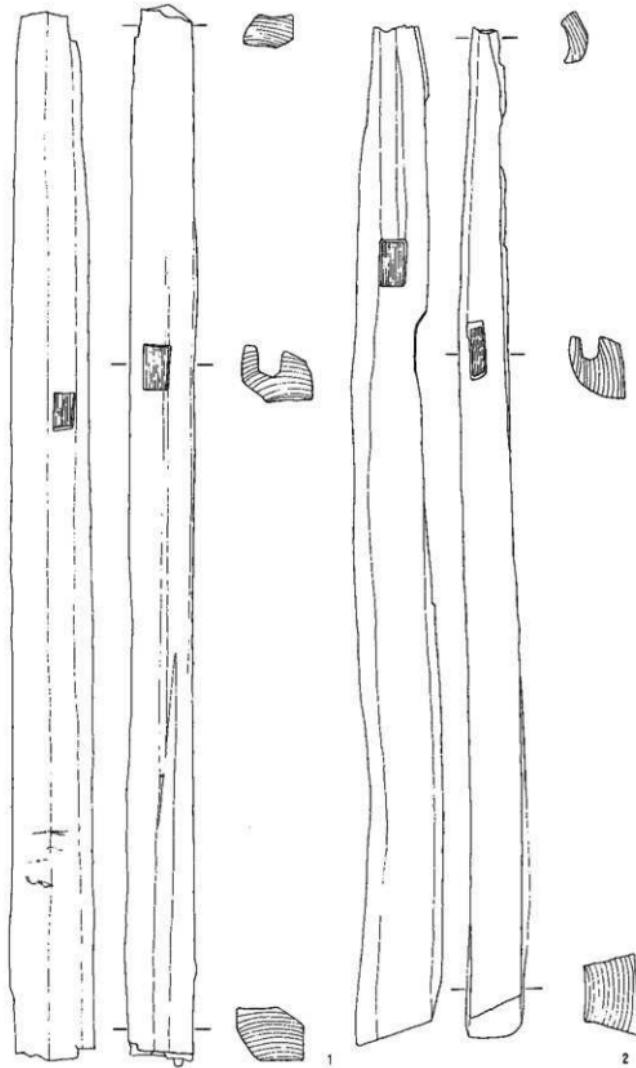


図21 SE-01隅柱 1～2 (S=1/6)

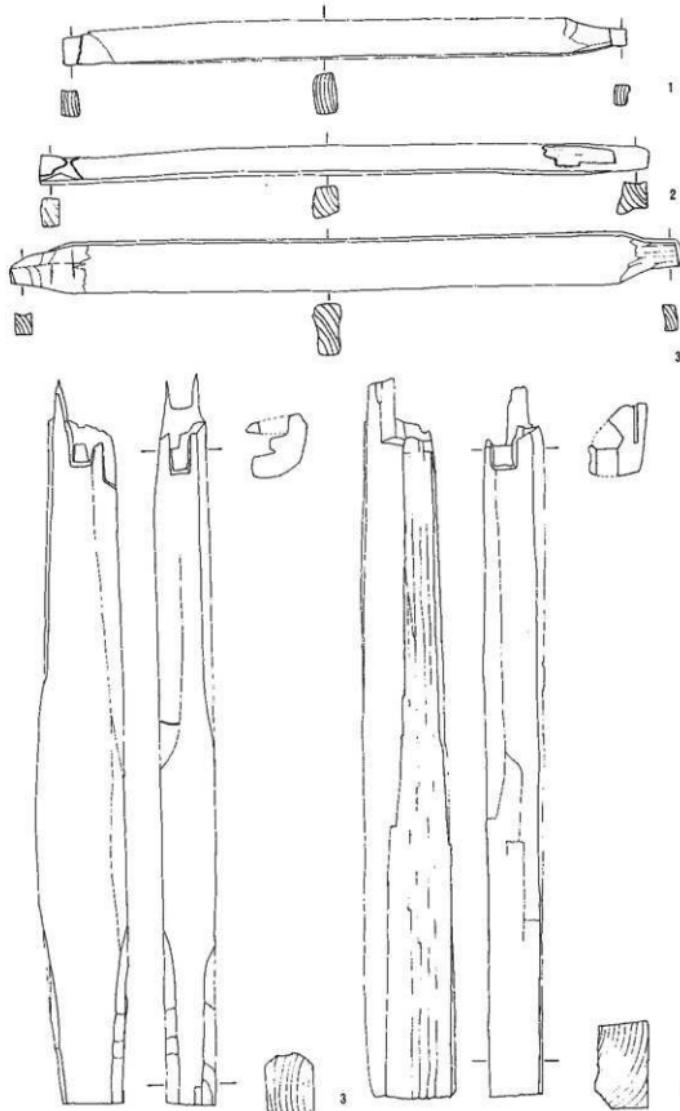


図22 SE-03上段井側横棟 1~3・下段井側隅柱 3・4 (S=1/6)



図23 調査区全景



図24 調査区状況(①調査区)



図25 調査状況(③調査区)



図26 調査状況(③調査区)



図27 ①調査区(本調査)全景



図28 SE-03



図29 SB-01



図30 ヒョウタン製柄杓出土状況



図31 ⑥調査区(本洞庭)全景



図32 SE-01

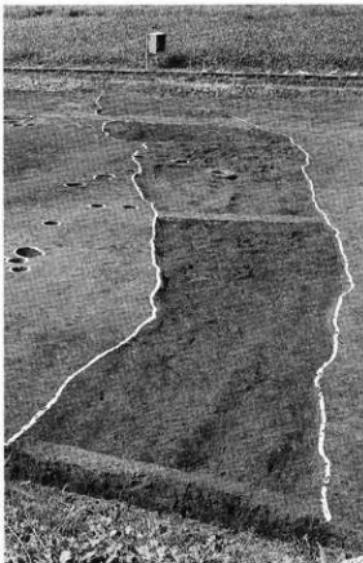


図33 SD-06

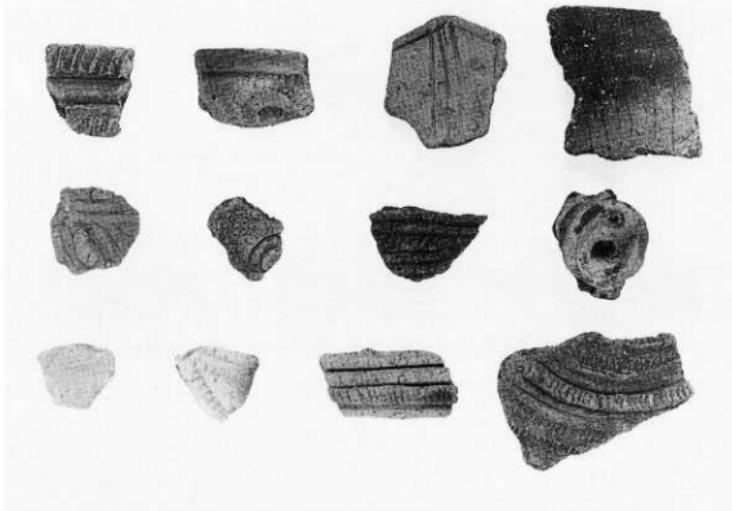


図34 純文土器



図35 土師器

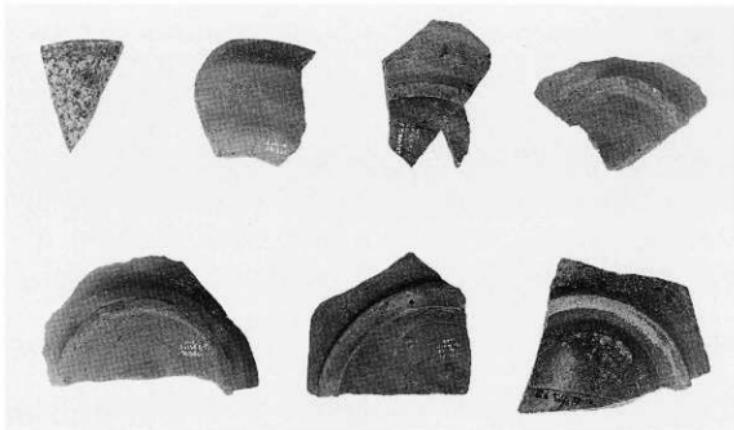


図36 須恵器

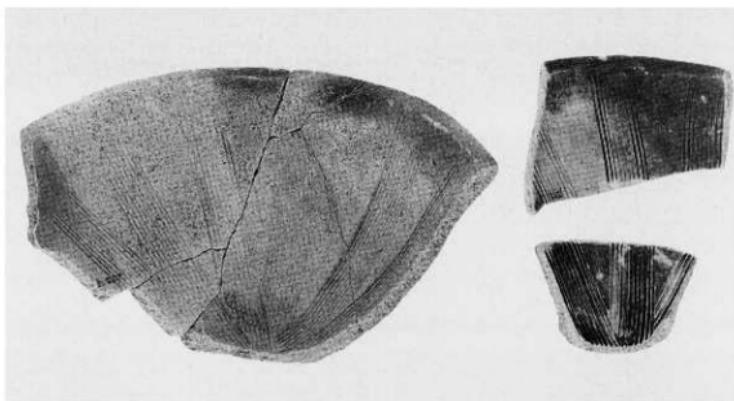


図37 土師質の擂鉢

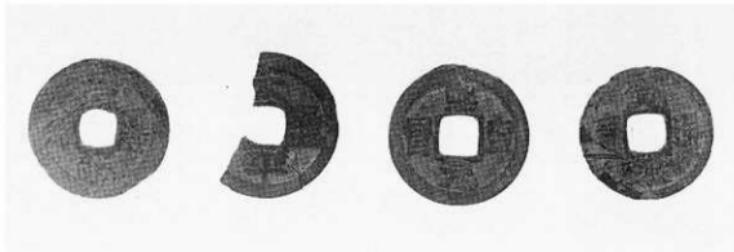


図38 宋銭

IV 高木山遺跡発掘調査概要

所在地 小矢部市浅地浄土寺120-1外

調査期間 平成8年4月1日～4月30日

調査対象面積 17,000m²

調査の原因 特別養護老人施設建設

調査日誌(抄)

4. 2	試掘ピット掘り下げ。土器検出。	4. 17	遺跡範囲の確定作業。
5	S・T地区試掘ピット掘り下げ。	4	B地区に土塁、ピット検出。
11	G・H地区土器取りあげ作業。		図面作成開始。
17	Q・R・Y地区試掘ピット掘り下げ。	30	埋め戻し。現場終了。



図39 発掘調査位置図 (S=1/15,000)

調査概要

高木山遺跡は小矢部市南部になだらかに連なる蟹谷丘陵の尾根上に位置する。当地は標高70mを測り、現在は遺跡の大部分は昭和51年に建設された千羽平野外活動センターの中に含まれ、遺跡内にはサイクリングロードが敷設されている。周辺には淨土寺遺跡、ズンデ山遺跡などの縄文時代中期を中心とした遺跡が分布している。

調査は対象地全域に一辺約1mのテストピットを設定し、遺構・遺物の分布状況を把握した後、分布が濃密な部分について適宜調査区を拡張した。この結果、調査対象区の大部分が遺跡対象区になることがわかり、このため原因者と協議の上、特別養護老人施設予定地が変更となり、一部を除き遺跡の保存をすることができた。

遺構

調査対象地の東に位置し標高約70mを測るB地区で、土坑1基(SK-01)と溝状遺構1条(SD-01)が検出された(図44)。SK-01は直径約180m、約70cmの深さを測る。SD-01は幅約20~30cmの溝が梢円状に走る。いずれも出土遺物から、縄文時代中期前葉から中葉に所属する。

遺物

出土した遺物には、縄文土器、上偶、動物型土製品、石器類がある。縄文土器は多量に出土し、その大半は調査対象地のほぼ中央部に位置するE, F, H, I, J区に集中している。遺物の時期は新崎式に属するものが主体を占め、若干だが新道系土器が含まれている。このほかには、上山田I式もわずかに見受けられるが、この遺跡の時期は縄文中期前葉に比定される。深鉢形土器には、ゆるく外反・直立する口辺部を持つもの、キャリバー状の口辺部を持つもの、波状口縁を持つものが認められる。文様は口辺部を横走する半降起線文や、蓮華文が施される。胴部には斜縄文地にB字状文や、格子目文を施されたもの、全面に斜縄文が施されたものがある。浅鉢形土器には、口縁上部が立ち上がるものと、口縁部が内渦するものがある。

土偶は胴体、腕、脚の部位破片が4点出土した。胴体部破片は腹部を膨ませ、沈線により加飾され、頭部接合面には小孔が1つ、脚部接合面には小孔が2つ見られる。腕部破片は板状で両手を左右水平にひろげた状態を表している。頸部接合面には小孔が1つ見られる。

動物型土製品は、J地区より出土した。欠損部分もあるがほぼ全容を知りうる中空の円筒状を呈する。全長15cm、直径8cmを測る。頭と推測される部分は半分を失っているためその全体像は不明であるが、口の部分の形状が井戸村・井口遺跡出土の異形注口土器(イノシシ形注口土器)に類似している。脚部はその痕跡から、長さ2cmのものが4本であったが、2本欠損している。胴部には半截竹管による連続爪形文を施した半降起線が縱走している。各部位の特徴から、縄文中期前葉の時期のイノシシを意匠化したものと推測される。

(藤城)

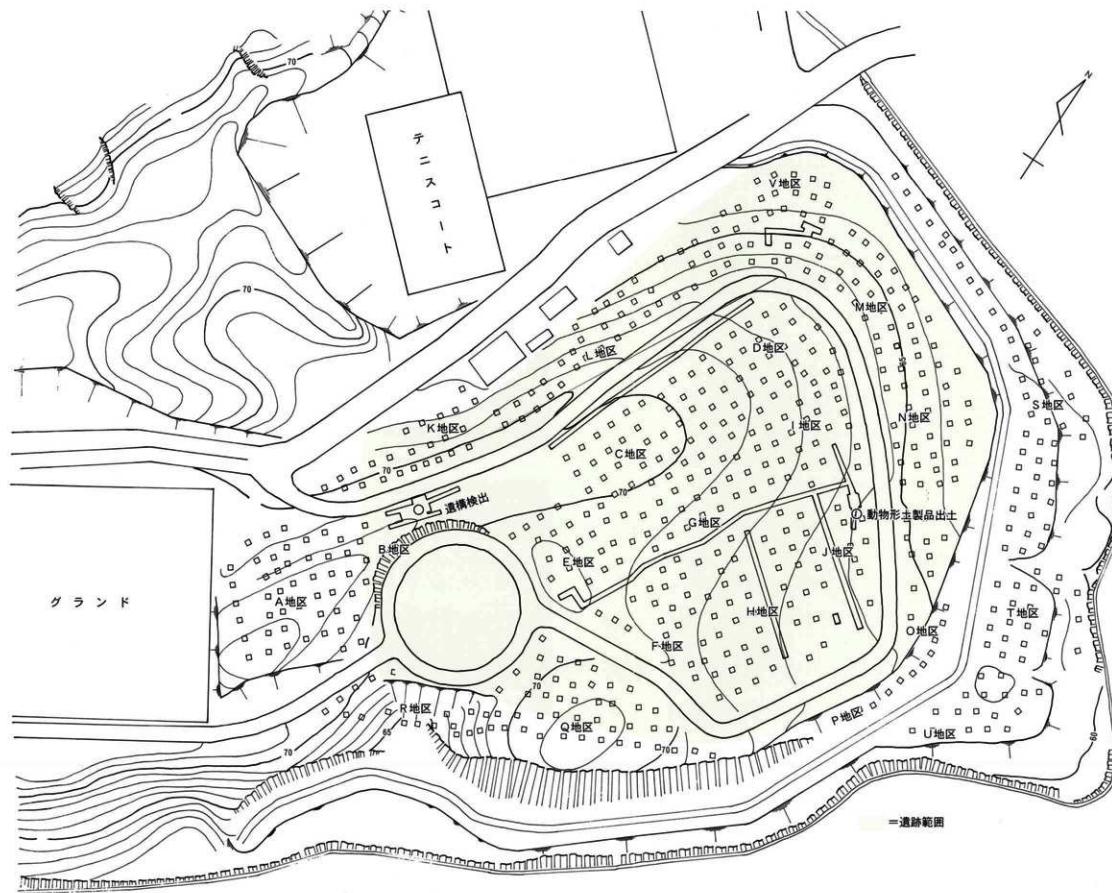


図40 試掘トレンチ位置図 (S=1/800)



図41 遺物出土状況(E地区)



図42 遺物取り上げ状況



図43 遺物取り上げ状況



図44 遺物検出状況(B地区)

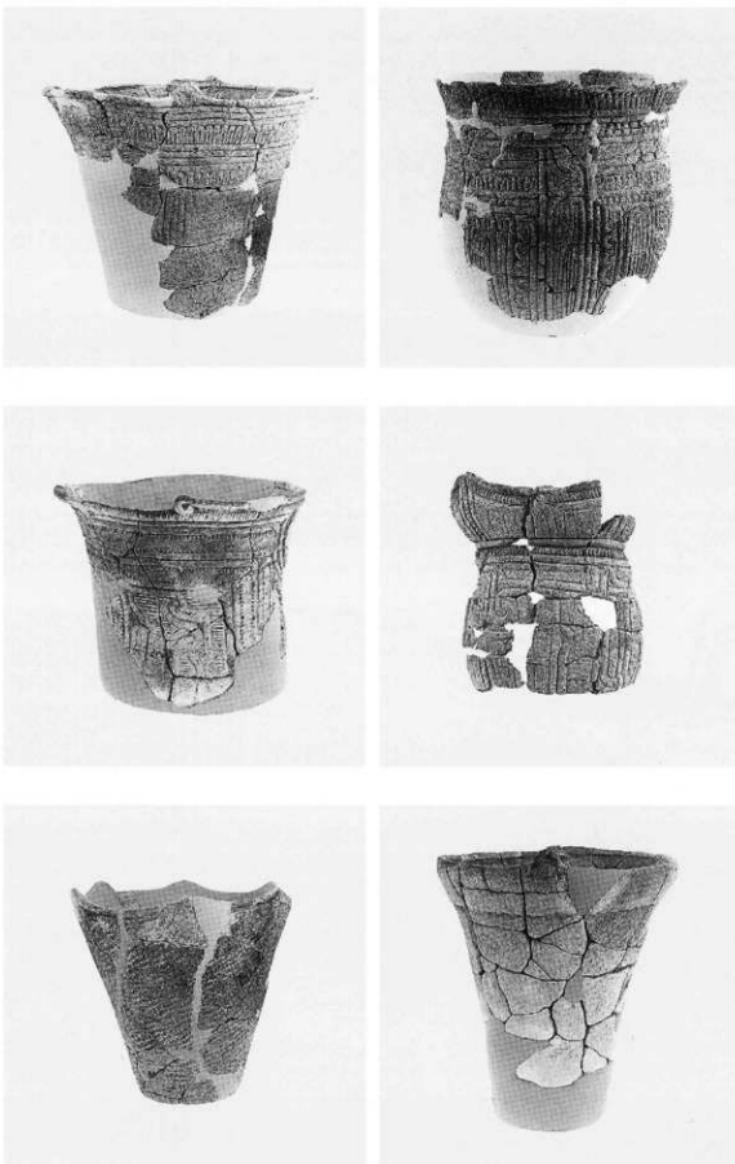


図45 織文土器



図46 縹文土器



図47 動物形土製品

報告書抄録

ふりがな	へいせいはらねんど おやべしまいそうぶんかさいだくつじょうきめいほう						
書名	平成8年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ名・番号	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第45冊						
編著者名	藤城 全代						
編集機関	小矢部市教育委員会						
所在地	〒932 富山県小矢部市本町1番1号 TEL 0766-67-1760						
発行年月日	西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査 面積	調査原因
市町村 遺跡番号		。	°	'			
にゅううわの 埴生上野 いせき 遺跡	とやまけんおやべし 富山県小矢部市 にゅううわの 埴生上野4829	16209	052	36°39'32"	136°51'15"	19960514 19960608	825m ² 宅地造成
ひみや 日の宮・ どうりんじ 道林寺遺跡	とやまけんおやべし 富山県小矢部市 どうりんじ 道林寺312-1外	16209	057	36°38'50"	136°51'20"	19960401 19960430	19,933m ² 分譲住宅 地造成
たかぎやまいせき 高木山遺跡	とやまけんおやべし 富山県小矢部市 あさじ ようじ 浅地字淨土寺121-1外	16209	151	36°37'22"	136°52'45"	19960401 19960430	17,000m ² 特別養護老人施設建設
所収遺跡名	種 別	古 代	主な遺構		主な遺物		特記事項
埴生上野 遺跡	散 布 地	縄 文	溝4条・柱穴		縄文土器・須恵器 弥生土器・土師器 珠洲		
日の宮・ 道林寺遺跡	集 落	古 代 中 世	振立柱建物2棟・井戸 3基・溝9条・柱穴		縄文土器・須恵器 土師器・中世土師器・宋銭・珠洲		
高木山遺跡	散 布 地	縄 文 中 期 前 葦	土器廐棄場		縄文土器(新崎～ 上山田I)・石器類 動物型土製品		

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第45冊

平成8年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報

発行日 1997年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会

(〒932 富山県小矢部市本町1番1号)

TEL 0766-67-1760

印刷 株式会社 アヤト

